障害児教育

「多様な学びの場」の本当の充実を

山下　洋児

「先生が足りない」が見えにくい

特別支援学級、通級指導の現場からも教員欠員の影響に苦しむ声が聞かれます。「通常学級の担任の先生がいない」となったら大変なことです（それが残念ながら起こっていますが）。しかし、特別支援学級の担任は複数配置されているので、欠員が見えにくい状況にあります。「特別支援教室」は、さらに見えにくい状況に置かれています。そもそも、通常学級も特別支援学級もその学校の児童・生徒数によって学級編成がなされ、それに応じて教員が配置されます。しかし、特別支援教室は、「区市町村ごとに児童・生徒12名に教員1名」を配置することになっています。ですから、元々教員の欠員がなくても区市町村内の教員の割り振りの関係で、例えば児童・生徒が13名いても教員が1名のまま、という状況もあったのです。

そのような状況の中での今年度の教員の欠員です。まずは見えやすい通常学級担任の欠員から埋めていくということが起こっているのではないでしょうか。

しかし、どこの場であっても教員の欠員はあってはならないことなのです。

「多様な学びの場の整備」はどうなった？

中教審「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」は、２０１２年「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」を出しました。そこには、「多様な学びの場の整備と教職員の確保」として、以下のような項目が挙げられています。

・多様な学びの場として、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校それぞれの環境整備の充実を図っていくことが必要である。

・通常の学級においては、少人数学級の実現に向けた取組や複数教員による指導など指導方法の工夫改善を（略）

・通級による指導を行うための教職員体制の充実が必要である。

報告から10年以上が経っていますが、どうでしょうか？東京の特別支援教室の教員配置はむしろ後退しています。

私たちは、子どもたちが通常学級でも、通級指導の場でも、特別支援学級でも、特別支援学校でも、どの場を選んでも豊かな教育を受けられる教育条件が整えられることを望んでいます。

※部会メンバーで『特別支援教室を担当するあなたへ～明日からの実践づくりのために～』という冊子を作りました。小集団指導の実践を中心に、特別支援教室教員の「やりがい」についての論稿も載せました。「パイロット版」ということで、様々な意見をもらいたいと考えています。（必要な方は、都教組障害児学級部までお問い合わせください）

（共同研究者）